

千葉省三童話全集

(第三卷)

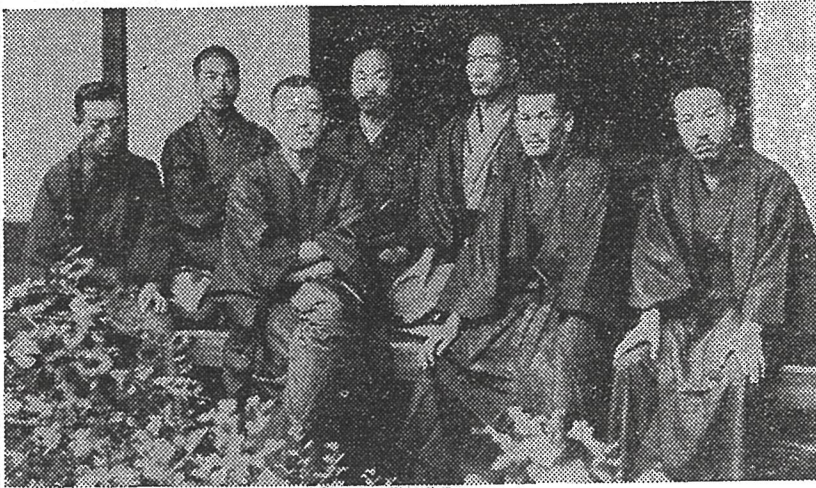
3 月 報

目次

わが最良の時代……………北村寿夫(一)
五十年を通じて見た千葉さん…淡沢青花(二)
『赤い鳥』と『童話』……………与田準一(四)
千葉文学のふるさと(一)……………池田春子(六)

東京都文京区
水道 1-9-2

岩崎書店



コドモ社時代(大正7)後列左・千葉省三氏、前列左・川上四郎氏

雑誌童話のころ(二)

先号では千葉文学の愛読者の立場から、当時の思い出や、作品との出会いについて語っていただいたが、今回は、「童話」に引きつづく「童話文学」(昭3~昭5)の時代に同人として千葉氏と親しい交りをもった北村寿夫、淡沢青花の両氏に回想ふうのエッセイをお願いした。いずれも貴重な、時代の証言である。また与田準一氏には「赤い鳥」と「童話」について、比較雑談論的な展開をお願いしたが何分、十分な紙数がさげず、残念であった。

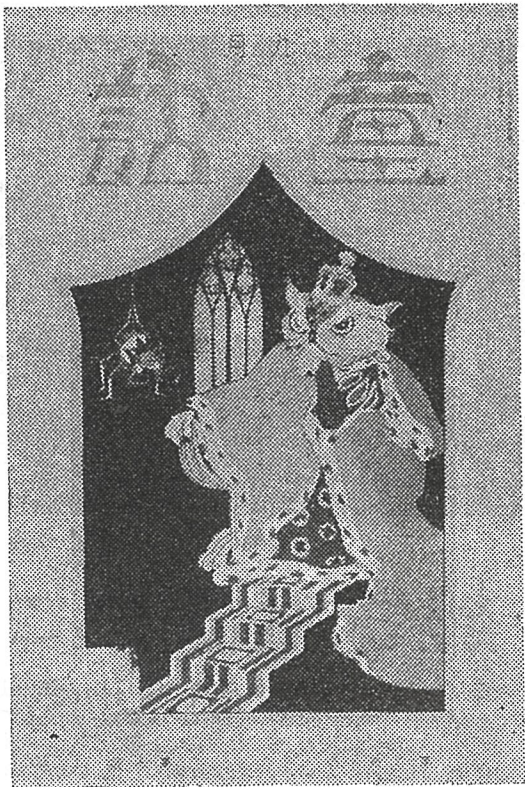
わが最良の時代 北村寿夫

あの当時は……などと訊かれると、いつも困惑してしまう。僕は妙に過ぎ去ったことを覚えていない。反対に事こまかに、昔のことを記憶している人がいる。そんな人から見ると僕は馬鹿に見えるだろう。それほど僕に僕は過去オンチなのである。

こんど、千葉省三の全集が出るとき、よかったよかったと思った。以上のようなわけで千葉氏との出会いや交情についても細目的には、どんなことがあったとか、どこでどんな話をしたとかいうことは、殆んど憶えていないが、彼から受けた親切や友情については忘れたことはない。

たしか、彼に紹介してくれたのは、水谷まさるだったと思う。水谷は僕とは中学時代からの友だちだ。水谷が少女画報の編集者をしていとき、僕は、よく、少女小説をかかせてもらっていた。水谷につれられて、小石川の林町にあったコドモ社へ、「童話」の編集長であった千葉氏を訪ねていったのだと思う。

どういふわけか、「童話」では、僕の作品を高く買ってくれ、毎号欠かさずに書かせてくれた。つまり、僕は千葉省三に



『童話』大正14年8月号

引き立ててもらったのだ。若冠二十何歳かの僕に投稿の選者を頼んだのも彼である。

千葉氏は編集者であつたし作家でもあつた。彼自身すぐれた童話作家であつたことは誰でも知っている。その彼がどうして僕を買ってくれたのか。彼は地に足のついた郷土的作品をものし、僕はどちらかと言うと、都会的で、感覚も文章も、西欧脈をひき、彼とは対照的であつた。その僕を、あそこまで励まし支援してくれたことを、今でも不思議に思う。あるいは対照的だつたのがかえってそんな結果になつたのかも知れない。僕はコードモ社には終始寄稿家であつた。一度も内部の人間になつたことはない。毎号、童話をかいていたが、千葉氏からは一度として文句を言われたことはない。いつも、無条件で掲載され

た。彼はいつも、ニコニコと温顔をもつて接してくれた。

あの時代は、僕の最良の時代だつた。「童話」の原稿料や童話集の印税で、ともかく、母と二人、生活ができたのである。

千葉省三や川上四郎、河目悌二などとの交遊は楽しかった。交遊と言っても、コードモ社の豊敷きの編集室での雑談である。

だんだんに僕も多忙になり、ごぶさたにばかり過ぎていったが、健在で、全集出版にまでこぎつけた彼を思い、あらためて作家としての彼の業績をたたえ、編集者としての彼の功績に感謝する。(児童文学者)

五十年を通じて見た千葉さん

——笑顔の生長—— 沢沢青花

大正年代の初めに、児友倶楽部というものがあつた。少年少女雑誌の編集者、作家、口演童話家、その他児童教育に関係している人たちの懇親団体だつた。

だれの発起でできたのか、まただれが世話を焼いていたのか、今ではさっぱり記憶がない。それでも、日比谷公園の松本楼で年に一回くらい開く、この倶楽部の例会に、一度か二度出席したことがある。

そのときわたしは実業之日本社の「少女の友」の記者だつた。

主筆の星野水裏さんにつれられていった。参会者の顔ぶれには巖谷小波、久留島武彦、生田葵、天野雉彦といった人たちがいたように思う。犬が好きで、鳴き声のじょうずなお医者さんがいたのも記憶している。

コードモ社の木元平太郎さんは、もと実業之日本社に關係のあつた人で、やっぱり出席していたが、一人の若い社員をひきつけていた。それが千葉さんだつた。

木元さんは如才なく、わたしのような青二才にも千葉さんを紹介して、

「わが社の有望な社員です。どうぞよろしく。」

と、かわいいわが子を引きあわせるようにいった。

羽織袴の和服姿で、鼻下に髭を貯え、頭は五分刈り、青黒い顔色をして、まだ田舎から出てきたばかりの教員といった風采で、失礼ながら垢ぬけがしてなかった。

もちろん話しあうこともなく、こっちは記者生活三、四年の駆けだしだから、隅の方に小さくなっていた。

それから後、大正十二年、関東の大震災でわたしは実業之日本社を退いた。

その頃童話作家協会が誕生して、わたしも千葉さんも会員になつた。しかし顔を合わせるのは、年に一度の例会の時くらいで、親交を結ぶまでにはいたらなかった。

わたしと千葉さん結びつけたのは、『童話文学』の同人としてである。『童話文学』は酒井朝彦、水谷まさる、北村寿夫、千葉省三、四氏によって創刊されたもので、北村氏が脱退したのを機会に、伊藤貴鷹、松原至大、わたしの三人が参加した。九冊目からである。

あの時代を回顧すると、楽しい。よく書き、よく談じ、また広告をとり歩いたり、雑誌を店頭においてもらいに歩いたり、大わらわだつた。

郷土色ゆたかな千葉さんの作品も、みんなこの時代のものである。その頃の千葉さんは、はじめて逢つたときのような、暗い影はなかった。じつに生き生きとしていた。

戦時中、千葉さんは信仰の人となつて、遠く越後の方へ移つていった。ここで二十年以上の歳月が、わたしたちの間を隔てた。

千葉さんがまた東京にもどつてきて、相逢うようになったのは、最近である。そこには、はじめて見たときのような暗さも、ぎこちなさもない。また同志であつた頃の花々しささえ姿をかくした。あるのは温和で、円満な笑顔である。人格の完成であらう。(児童文学者)

『赤い鳥』と『童話』 与田準一

千葉省三氏が東京コードモ社にはいられ、大正九年春、同社から創刊されることとなる雑誌『童話』をめぐる事情や当時の抱負など私は、氏の回顧の文章「あのころのこと」(鳥越信他編「新選日本児童文学—大正編」所載、小峰書店発行)で知るところをえました。それと吉田精一氏の「鈴木三重吉論」(日本児童文学学会編「赤い鳥研究」所載、小峰書店発行)とを讀みくらべると私には、雑誌『赤い鳥』と『童話』の性格の同根とそ

のちがいがとりだされてくるかと思ひます。

この小文では詳しく書けませんが、作家としての鈴木三重吉が小説を去つて童話に行つたということ、『赤い鳥』で考へたお伽話の改革が内容としては主に感情方面、もしくは表現、文章

の方面に重点をおいたこと。これに対して千葉さんはまだ作家の経歴はなく、当時の頃までにどのような文学的歷程——作家前期の——を持たれたのか知りたいところですが、『童話』の編集刊行のうちに千葉さんの作家としての熟成がはじまっていたと見られること。このちがいが二つの雑誌に投射し性格づけられていると見るができます。

「まず第一に、厳正な意味での創作童話を必ず巻頭にのせようということ。次に、ほんとうに童話童謡に打ちこんで書いてくれる新人を探し出すこと。第三に、日本の土に生まれた郷土性のある童話童謡を尊重しようということ。」

千葉さんはこう、創刊にこぎつけるまでの雑誌『童話』の構想を回想されていますが、第一の構想については、すでに刊行されていた『赤い鳥』とちがった色合いを出すためにもぜひ必要だと思った、とものべられています。

こうしてたしかに『赤い鳥』とその運動の全体的すがたにはいわば西欧的教養主義としての創造性といったものが浮かぶのに対して、この千葉さんの構想から誕生した「童話」のそれには、いわば大正前期におこった新興日本のいわば郊外へのびる都市性とそれと不可分な関係にあった農村性にもかもされる生活のにおい、土のにおいといったエネルギーが感じられました。未完成であるがゆえの可能な想像力——今から考えるとそのイメージはコジンマリとした感じながら、粗礫性も含む新興の姿勢——を刺激してくれました。『赤い鳥』の方は、はじめからすでにイメージとして完全を内包した理念世界をかかげたかの印象です。



初冬の武蔵野で千葉省三氏（昭和42年）

赤い鳥



『赤い鳥』昭和6年

さて、私が『赤い鳥』の読者となったのは大正九年頃から、あわせて『童話』の読者となったのは大正震災後のことでした。郷里の本屋の店頭でたまたま一冊か二冊くらいが配本されていたのを見つけたして購読するようになったと記憶しています。

また初めて投稿したのは大正十四年七月号に入選した『笑えぬこと』で、童話の選者はその頃北村寿夫氏でした。翌十五年七月号をもって終刊となる一カ年のあいだに四度ほど投じて三度入選し、一度は選評にとりあげられた偶発的ともいえたところでは、『赤い鳥』のその欄がきびしかったことと考えあわせて今も記憶のなかによりみがえってきます。前にあげた「あのころのこと」に、「しかし、児童の為の雑誌『童話』の傾向は、形が完成するほど一般の児童の手から離れて、童話愛好者である

青少年の機関誌のような形を呈して来ました。」とある通り、私などもその機関誌的あるいは同人誌風の、あたかも通信学塾生のひとりでした。この傾向は差異を持ちながら『赤い鳥』も同様になっていったことは、大正期児童文学内部発想、また児童文化の外的状況からの一つの研究テーマでしょう。

日本近代文学史のなかに同人誌史といった分野が開拓されたらおもしろいでしょうが、今、日本児童文学の流れのなかで同人雑誌の形跡を想像してみますと、『赤い鳥』いぜん『童話』いぜん、いわゆる同人雑誌といったものは多分なかったのではないでしょう。

大正期後半では主に童話分野に多くガリ版刷り同人誌が続出したのが特徴的印象ですが、この大正の草創時代は、『童話』にしても『赤い鳥』にしても同人誌的要素をもふくむこととなつた、と回顧されます。

そして児童雑誌がそういう要素をふくむようになる事情は、いわゆる文芸雑誌が持つそういう要素とはちがった問題を提示するかのようです。

さてそういう事情はありながら『童話』が残した千葉文学の結成とともに、東京の郊外的あるいは武蔵野の自然と「児童の人生」を表象した川上四郎氏の童画、作曲をこぼんだといわれる自然観照とヒューモアをうたいこんだ島木赤彦の童謡、この三つは千葉さんの抱負であった土に根ざした『童話』のいわば三本の柱でばなかつたが、これに、学校劇に親しみのある刺激をあたえてくれた北村寿夫氏をはじめとする足跡も忘れられないものです。

千葉文学のふるさと(二)

池田春子

千葉県三の文学は典型的な日本の農村を中心に展開されるが、特に省三自身の故郷である栃木県檜木(鹿沼市)及び吉沢(今市市)附近は特に具体的な地名を伴って登場する。筆者は東京教育大の学生であるが、卒業論に千葉県三論を選び、取材のため、檜木、吉沢を訪ねたものである。



吉沢近くの杉並木

(四) 磯への道すがら

田中さんと連れ立って街道を南へくだる。旧檜木小学校のあたりから六、七分も歩くと家並が切れ、道は「分され」になっている。その分れ目には高さ一メートルほどの石柱がほこりをかぶって立っていた。よく見ると「左江戸道」「右仲仙道」とならべてはりつけてある。代用教員時代、檜木の家から磯の学校まで約二キロの行き帰りに東京へ出ることを考えながらこの石の道標を見て通ったのだらうか、と若い日の省三氏を思い浮べた。

西山は檜木のずっと北から東武鉄道の線路と平行にうねうねと続き、磯のあたりで少し高くなつてそこでおしまになる。その頂上は「鶴が峰」と呼ばれている。

省三さんが、ちょうどこのあたりの山をさらっとスケッチしたのを見せてもらったことがあるが、うまかったね。簡単に描いていてなかなか感じがでてくるんだよ。——千葉氏は絵もよ

くかいたらしい。

鶴が峰のあたりで左へ折れ、台地を登る。一足ごとにふり返って見る西山が高くなってくる。

あの頃はここら一帯みんな赤松林でした。磯学校も松林を切りひらいて建てたんですと。

登りきったあたりからは左手に磯、檜木一帯が見渡せる。きつとここからは日光山がひとときわ高くくつきりと見えるに違いないと思うと、くもり空がうらめしかった。

途中、昭和十年代に『トテ馬車』や『竹やぶ』を愛読し、生徒たちにも読み聞かせたという南押原中学校の校長先生に行き会った。磯高等小学校は現在南押原中学校と南押原小学校とになっている。

(四) 磯——代用教員時代の千葉県三

(塩沢先生の話から)



田中英雄氏夫妻

明治末年から大正三年にかけて省三氏(二十歳—二十二歳)が代用教員をしていた磯小学校で当時から三十年間校長を続けられた塩沢三郎先生は明治十九年生まれ、省三氏の父亀五郎先生の教え子でもある。独学で検定に合格して以来磯よりほかに勤めたことはないということ、磯一帯での人望は絶対的といえるほど。小柄で

温和な、思索的な先生であった。

省三さんのことかい。

ぼつりぼつりと話してください。

夜ふかしで、学校にもものんびりやってきましたっけ。身体が弱く、ヤセッポのくせに不養生でしたな。酒はあまり……。

綴方の指導じゃピカ一でしたな。何しろ熱心だったし……。図画にも熱心だったな。文才があつてね、省三さんという人は天才肌だったな。今でいえば当直日誌のようなのに代り番でその日のことを書くんだが省三さんのはおもしろいんですよ。子どもの様子なんぞもね、真似したかったができなかった。

それとお話、毎日弁当をしようと話をしてやっていたね。生徒たちはそりゃあ楽しみにして夢中で聞いていましたよ。それが、次の授業の鐘が鳴つてもやめなかったり、ひどいときには読み方も何もやらんで二時間もぶっ続けでやったり、……まあ校長としちゃ困りましたが、わがままな人でしたし、やりたいようにやらせておきました。

塩沢先生は困ったと言いながらも省三氏のやり方にはひかれるところがあつたに相違ない。口ぶりからそう感じられた。

増淵先生とは、ありや今でいえば恋愛結婚だんな。さっぱりしたいい気性の人だった。

そうそう、

と田中さんがとっておきの話を持ち出す。

増淵さんの方でも省三さんのこと気に入ってたんだな。それが証拠に、省三さんは「そんな愚なこと、バカなこと」というのが口ぐせだったっけがその「愚なこと」がいつのまにか増



檜木の宿

という土地ことばがやさしく耳にひびいた。

(教え子の目から)

塩沢先生に教えられて、当時の教え子、鈴木幸一郎さん、鈴木清一さんと鈴木要さん宅でお会いした。幸一郎さん、清一さんとも明治三五年生まれ、農業をしておられる。

文章がうまかったなあ。

開口一番、清一さんが言った。

綴方を一生懸命教えてくれたっけが、そのままもらさず書け、あったこと、思ったことをそのまんま、とそればかり言われた。

と幸一郎さん。

俺なんかきかねかったからすぐ裏の山に逃げ出して、どうせいいや、つていつまでも遊びほうけて立番ばかりさせられた。

淵さんにうつっていたんだ。

雑誌など取るのが好きで、本はよく読んでいたね。私(塩沢先生)が読んでると、おやおれも読もうというわけで教育学や心理学もよく読んでいた。本を開いて道を歩きながら見ていたっけが、そう、それが癖だね。

塩沢先生の娘さんが世間話をしながらお茶を入れてくださったが、「それでやんす」「あにさん」

——まったく一本気だったから。塩沢先生から教わったものと同じだね。俺はだから間違ったことは大きらいでね。

青年団長、消防団の組長、氏子総代などを歴任、今は老人クラブの幹事という親分はだの幸一郎さんは、だんだん話を市会議員選挙の方へもっていった。田中先生は思わぬところで思わぬハッパをかけられて弱ったようににこにこ笑っておられた。

(内) 豊ちゃん

思い出をそのまま思い出としてまとめた作品「きょうだい」の「芝居ごっこ」は

「豊ちゃんのうちの竹やぶで、芝居ごっこをやることになりました。豊ちゃんのおとつあんは、浄瑠璃をかたるので、豊ちゃんも、いろんな芝居のことを知っていました。」と書き出されているが、この豊ちゃんこと臼井豊吉さんは西山の裾に居をかまえて、今でもご健在である。早上りの省ちゃんと同級生だったというからもう七十七になられるわけだ。

太いまゆ、がっしりと整った顔のつくり、大柄で、いかにも弁慶の役がびったりだったろうと想像される。その上、口からはやはり義太夫で鍛えた声と口調で、あとからあとからことばが流れてくる。ほがらかなリズムにのって——腹を立てずに目標たてて無駄を出さずに汗を出せ。朝起きたらこうして合掌、親をおがめ、親ほど有難いものはない。愚者は語る、賢者は黙す。こんな調子で説法を続けてもう三十年余り、義太夫のサービスつきであちこちに講話に呼ばれていくそうである。西山にた

ずねてくる信者もいるという。

——芝居ごっこ、よくやりましたね。私が座長で省ちゃんは座付作者つてとこだったねつくるのがうまかったからね。省ちゃんは、ワッハッハッ。元気でいますか。そらあ何より。お子さんは幾たり、そうですか。私しや十一人生んでひとりしか残らず、何度鉄道へ飛びこもうとしたか、しかし死ねなかった……。

豊吉さんの話はまたお説法に戻っていった。

〈新装版の読者へのお断わり〉

この月報は、初版発行時に挿入されていたものです。ですから、執筆者のなかには鬼籍にはいられた方もいますし、勤務先、肩書が現在と変わっている方もいます。そのことをお断わりします。

なお、初版第一巻の刊行は昭和四十二年十月で、以後、巻数順に毎月一冊出版され、昭和四三年三月に全六巻が完結しています。

(岩崎書店編集部)